

# 大学生の攻撃性

## 1年生の攻撃性を中心にして

朝長昌三 福井昭史 地頭園健司  
中村千秋 小原達朗 柳田泰典

Aggressiveness of University Students: Aggressiveness of Freshmen

Shozo TOMONAGA, Akifumi FUKUI, Kenji JITOZONO,  
Chiaki NAKAMURA, Tatsuro OBARA, and Yasunori YANAGIDA

### 目 的

攻撃性は、対人関係や適応上の問題、さらには精神や身体の健康の問題をもたらす原因と考えられ、健康心理学、行動医学、発達心理学、教育心理学の分野で研究されている。

健康心理学や行動医学においては、攻撃性の一特性である敵意が冠状動脈性心臓病の危険因子となっていることが報告されたことが、研究の契機となったとされる。発達心理学や教育心理学の領域においては、青少年による暴力犯罪、学校における校内暴力やいじめなどの増加により、研究がより進められたと考えられる。

一般的に、怒りが生じると反応的攻撃が起こると考えられている。反応的攻撃は、フラストレーション理論に裏づけられ、衝動性と深く関わり、情動制御がうまく働かないことが攻撃に関わるとされている。そして発達のみにみた場合、情動制御に関する能力の獲得の遅れが反応的攻撃と深く関わってくると予測されている。

朝長ら(2006、2007、2008、2009)は子どもの攻撃性について、反応的攻撃に着目し、反応的攻撃を身体的攻撃、言語的攻撃、短気、敵意の4特性から検討し、以下のような結果を得た。

小学校4年生から高等学校3年生までの男子の場合、小学校4年生から6年生までは表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大で、中学校1年生から高等学校3年生までは身体的攻撃が他の3特性よりも大であった。また中学生では、言語的攻撃や短気が最も小であったりしたが、高校生では短気が最も小で、次が言語的攻撃であった。

女子の場合、小学校4年生から6年生までは表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった。また中学校3年生から高等学校3年生までは敵意が最も大であった。それに対して中学校1、2年生では敵意が最も大であったり、身体的攻撃が最も大であったりした。また中学生では言語的攻撃が最も小で、次が短気であった。高校生では短気が最も小で、次が言語的攻撃であった。

以上のように、われわれはこれまで、小学校4年生から高等学校3年生までの反応的攻撃について横断的な研究を行ってきた。

そこで、本研究では大学生の反応的攻撃を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の

4 特性から検討することを目的とした。

## 方 法

### (1) 回答者

大学1年生200名で、男子学生は131名、女子学生は69名であった。

### (2) 調査

調査は、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) を用いて行った。

本質問紙は情動的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」、攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」と「言語的攻撃」の4特性を測定する下位尺度から構成されている。

短気は、怒りの喚起されやすさを測定する尺度で、怒りっぽさ、怒りの抑制の弱さを測定する。敵意は、他者に対する否定的な信念・態度を測定する尺度で、他者からの悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する。身体的攻撃は、身体的な攻撃反応を測定する尺度で、暴力反応傾向、暴力への衝動、暴力の正当化などを測定する。言語的攻撃は、言語的な攻撃反応を測定する尺度で、自己主張、議論好きなどを測定する。

回答者は各質問に対して「非常によくあてはまる」、「だいたいあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5段階の1つに回答した。

## 結 果

結果の処理については、以下のように行った。

各質問項目に対して「非常によくあてはまる」に5点、「だいたいあてはまる」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「まったくあてはまらない」に1点を加算し、その合計点を各回答者の4特性の代表値とした。

判定基準に関しては、安藤ら(1999)のBAQの平均得点と標準偏差をもとにして作成し、各回答者の4特性の代表値にあてはめた。

統計処理に関しては、各回答者の4特性の代表値からt-検定を行い、以下のような結果を得た。

### (1) 男子学生の攻撃性 (n = 131)

身体的攻撃	: $\bar{x} = 17.886$	SD = 4.427	判定: 普通
言語的攻撃	: $\bar{x} = 14.771$	SD = 3.264	判定: 普通
短気	: $\bar{x} = 13.275$	SD = 3.914	判定: 普通
敵意	: $\bar{x} = 18.366$	SD = 3.995	判定: 普通

#### ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$t = 6.481$  ( $p < .01$ )  $df = 260$

#### ② 身体的攻撃と短気の比較

$t = 8.968$  ( $p < .01$ )  $df = 260$

#### ③ 身体的攻撃と敵意の比較

t = .923 有意差なし

④ 言語的攻撃と短気の比較

t = 3.379 (p < .01) df = 260

⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

t = 7.977 (p < .01) df = 260

⑥ 短気と敵意の比較

t = 10.469 (p < .01) df = 260

以上の結果のように、男子学生の攻撃性は敵意が最も大で、順に身体的攻撃、言語的攻撃、短気であった。また敵意と身体的攻撃の間には統計的に有意な差はなかったが、敵意と言語的攻撃および短気との間には有意な差があった。

(2) 女子学生の攻撃性 (n = 69)

身体的攻撃 :  $\bar{x}$  = 14.319 SD = 4.424 判定 : 普通

言語的攻撃 :  $\bar{x}$  = 13.522 SD = 3.018 判定 : 普通

短気 :  $\bar{x}$  = 13.913 SD = 3.555 判定 : 普通

敵意 :  $\bar{x}$  = 17.580 SD = 3.327 判定 : 普通

① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

t = 1.236 有意差なし

② 身体的攻撃と短気の比較

t = .594 有意差なし

③ 身体的攻撃と敵意の比較

t = 4.893 (p < .01) df = 136

④ 言語的攻撃と短気の比較

t = .697 有意差なし

⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

t = 7.504 (p < .01) df = 136

⑥ 短気と敵意の比較

t = 6.255 (p < .01) df = 136

以上のように、女子学生の攻撃性に関しては敵意が最も大で、順に身体的攻撃、短気、言語的攻撃であった。また敵意と他の3特性との間には統計的に有意な差があった。

(3) 性差

① 身体的攻撃

t = 5.418 (p < .01) df = 198

② 言語的攻撃

t = 2.640 (p < .01) df = 198

③ 短気

t = 1.138 有意差なし

④ 敵意

t = 1.400 有意差なし

以上の結果のように、身体的攻撃と言語的攻撃に関しては男子学生の方が大で、統計的にも有意な差があった。また敵意に関しても男子学生の方が大であったが、統計的に有意な差はなかった。しかし短気に関しては女子学生の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。

## 考 察

本研究の目的は、大学生の攻撃性を攻撃性の身体的攻撃、言語的攻撃、敵意、短気の4特性から検討することであった。

### (1) 男子学生の攻撃性

男子学生の攻撃性は敵意が最も大で、次に大であったのが身体的攻撃、次が言語的攻撃、そして最も小であったのが短気であった。敵意と言語的攻撃および短気との間には統計的に有意な差はあったが、敵意と身体的攻撃との間には有意な差はなかった。

小学校4年生から6年生までの男子児童の攻撃性は、表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大であった。このことは身体的攻撃を含む攻撃性が大であったといえる。また中学校3年生から高等学校3年生までの男子の場合も、身体的攻撃が他の3特性よりも大であった。しかしながら大学生になると攻撃性の認知的側面である敵意が最も大になった。

判定基準の「やや強い」と「非常に強い」を「強い攻撃性」とした場合、「強い身体的攻撃」の割合は17%、「強い言語的攻撃」は13%、「強い短気」は12%、「強い敵意」は17%であった。強い攻撃性の傾向としては、身体的攻撃や言語的攻撃、短気は高校生のときよりも減少傾向にあるのに対し、敵意の割合は大きくなっていった。

これらのことから、大学生になったことにより、さまざまな認知能力が発達し、仲間との相互作用の中でさまざまなルールを身につけることで、攻撃行動は望ましくないということを学習した結果、攻撃性の行動的側面や情動的側面は抑制される傾向になり、逆に認知的側面が優位になり、敵意が大になったのではないかと考えられた。

### (2) 女子学生の攻撃性

女子学生の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、順に身体的攻撃、短気、言語的攻撃で、敵意と他の3特性との間には統計的にも有意な差があった。

小学校4年生から6年生までの女子児童の攻撃性は、表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大であった。このことは身体的攻撃をふくむ攻撃性が大であったといえる。また中学校2年生では身体的攻撃が最も大で、次が敵意であったが統計的には有意な差はなかった。それに対して、中学校1年生と3年生では敵意が最も大で、次が身体的攻撃、短気、そして言語的攻撃であった。高校生では1年生から3年生まで最も大であったのは敵意、次が身体的攻撃、言語的攻撃、短気であった。

判定基準に関しては、「強い身体的攻撃」の割合は10%、「強い言語的攻撃」は4%、「強い短気」は7%、「強い敵意」は14%であった。強い攻撃性の傾向としては、4特性ともに高校生のときよりも減少傾向にあった。さらには高校1年生から大学生ま

で、強い敵意の割合が他の3特性の割合よりも大であった。

これらのことから、女子の場合、中学校3年生から攻撃性の行動的側面や情動的側面が抑制され始め、さらに高校、大学と進むにつれて、ますますそれが強められる一方、認知的側面が優位となり、敵意が大となったと考えられた。しかしながら、強い攻撃性は4特性ともに減少傾向にあった。

### (3) 性差

身体的攻撃と言語的攻撃に関しては、男子学生の方が大で、統計的にも有意であった。また敵意に関しては、男子学生の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。それに対して短気は、女子学生の方が大であったが、統計的には有意な差はなかった。

強い攻撃性に関しては、4特性ともに男子学生の方が大であった。また男女の攻撃性を高い順から、男子の敵意、男子の身体的攻撃、女子の敵意、男子の言語的攻撃、女子の身体的攻撃、女子の言語的攻撃、女子の短気で、最も低かったのは男子の短気であった。

これらのことから、大学生の攻撃性に関しては、男女ともに行動的側面や情動的側面が抑制され、逆に認知的側面である敵意が高くなっていることがわかった。すなわち、大学生になると男女ともにさまざまな認知能力がさらに発達し、対人関係のなかでさまざまなルールを身につけ、他者に対する身体的攻撃や言語的攻撃、さらには短気といった攻撃行動は望ましくないということを学習した結果、逆に他者に対する猜疑心や不信任感が一層高まり、敵意が大になったと考えられた。

## 要 約

本研究の目的は、大学1年生の攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から検討することであった。そして以下のような結果を得た。

### (1) 男子学生の攻撃性

- ① 敵意が最も大であった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い敵意」と「強い身体的攻撃」の割合が最も大で、17%であった。
- ③ 1要因型は41%で、4要因型は7%であった。

### (2) 女子学生の攻撃性

- ① 敵意が最も大であった。
- ② 強い攻撃性に関しては、「強い敵意」の割合が最も大で、14%であった。
- ③ 1要因型は26%で、4要因型は0%であった。

### (3) 性差

#### ① 身体的攻撃

男子学生の方が女子学生よりも大で、統計的にも有意な差があった。

## ② 言語的攻撃

男子学生の方が女子学生よりも大で、統計的にも有意な差があった。

## ③ 短気

女子学生の方が男子学生よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。

## ④ 敵意

男子学生の方が女子学生よりも大であったが、統計的には有意な差はなかった。

**参考文献**

- 市村操一（2004） 怒りのコントロール ブレーン社
- 神田信彦・酒井久美代・杉山成（2005） なぜ攻撃してしまうのか ブレーン社
- 島井哲志・山崎勝之（2002） 攻撃性の行動科学 健康編 ナカニシヤ出版
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2006） 小学生の表出性攻撃と不表出性攻撃に関する研究 長崎大学教育学部紀要, 70, 81 - 96 .
- 柳田泰典・朝長昌三・中村千秋・小原達朗・福井昭史・小島道生（2006） 子どもの攻撃性と他者認識 長崎大学教育学部紀要, 70, 1 - 15.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2006） 中学生の攻撃性に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第5号, 183 - 200.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2007） 小学生の攻撃性に関する研究 長崎大学教育学部紀要, 71, 49 - 59.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2007） 中学生における攻撃性の傾向に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第6号, 1 - 13.
- 朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2008） 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善 高校生の攻撃性について 長崎大学教育学部紀要, 72, 37 - 48.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2008） 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善 小学生の攻撃性について 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第7号, 11 - 22.
- 朝長昌三・福井昭史・地頭菌健司・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2009） 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善 中学生の攻撃性について 長崎大学教育学部紀要, 73, 17 - 30.
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典（2009） 生徒指導の質的改善に関する実証的研究 高校生の攻撃性について 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第8号, 1 - 13.
- 山崎勝之（2002） 攻撃性の行動科学 発達・教育編 ナカニシヤ出版